

群馬県歴史の道調査報告書第八集

歴史の道調査報告書

古戸・桐生道

群馬県教育委員会

古戸・桐生道

## 序

昭和五十年代における本県の社会開発の進展は著しいものがあります。関越自動車道・上武国道・上越新幹線の開通を控え、本県の産業経済文化にとって飛躍の年代といえましょう。また、これら交通網の整備に伴う社会生活の変革は県民の生活にも大きな影響を与えてきております。

これら近代化の波は、ふるさとの香りともいふべき郷土の歴史的遺産を急速に減失させつつあり、バランスのとれた開発が望まれ、保存対策が強く叫ばれるようになってまいりました。

本県では、こうした要請に応じて、昭和五十三年度から国庫補助を得て、四か年計画で歴史の道調査を実施してまいりました。本年度はその第三年次にあたります。これまでの二か年の調査結果については既に報告書で紹介したとおり、多くの成果を挙げることができました。

本年度の調査対象街道は、下仁田道、清水峠越往還、佐渡奉行街道、古戸・桐生道、古河往還の五街道であります。下仁田道を除くと比較的短い街道であります。しかし、それらの街道はその地域にとって重要な役割を果たしてきた街道であり、また、それぞれ特色のある道でもあります。

中世の道の面影をとどめる清水峠越往還・佐渡奉行街道。我国のシルクロード及び低湿地帯の街道である古戸・桐生道及び古河往還。また、砥石、こんにやくの道としての下仁田道等、地域の特色を持っております。

本調査で得られたこれら貴重な成果を、本書で広く県民に紹介して活用していただくとともに、今後における保存対策の資料として参考にしてまいりたいと思っております。

なお、末筆ながら、調査の実施と報告書の作成に御協力いただいた調査員の方々や、地元教育委員会並びに協力いただいた地元のみなさまに深く御礼申し上げる次第です。

昭和五十六年三月一日

群馬県教育委員会教育長

横 山 巖

# 目次

序 群馬県教育委員会教育長 横山 巖

Ⅲ 古戸・桐生道の現状と文化財

## 歴史の道調査実施要項

### I 古戸・桐生道の概観

一、道の呼称と沿線の状況…………… 3

二、渡良瀬川・利根川と渡船…………… 4

三、物資の輸送路…………… 6

四、文化の伝播路…………… 8

五、往来の実態…………… 9

### Ⅱ 道の確定

一、道の確定…………… 12

二、沿線地図…………… 15

一、古戸渡しから太田宿へ…………… 19

二、太田宿から松原渡しへ…………… 23

三、松原渡しから天満宮へ…………… 34

あとがき…………… 38

## 歴史の道調査実施要項

### 一、目的

古来、人や文物の文流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいうべき出緒のある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用を資することを目的とする。

### 二、調査主体者

群馬県教育委員会

### 三、調査の方法

#### (1) 指 導

調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

#### (2) 総 務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を統括する。

県教育委員会事務局管理部文化財保護課長並びに担当職員。

#### (3) 調 査 員

三 枝 友 治 千代田村教育委員会事務局長

沢 口 宏 太田女子高等学校教諭

石 原 純 一 伊勢崎女子高等学校教諭

今 井 英 雄 中央高等学校教諭

若 林 宏 宗 桐生高等学校教諭

荻 野 朝 則 館林市立第八小学校教諭

#### (4) 調査協力機関

太田市教育委員会

桐生市教育委員会

大泉町教育委員会

#### (5) 調査方法

○ 一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○ 二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

#### (6) 調査対象

昭和五十五年度は、古戸・桐生道及び他街道とする。

(調査事項)

① 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば関・番所・一里塚・宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御飯屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石畳・橋梁・隧道・常夜燈・道

標・地蔵・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的名所（社寺・札所・霊場・温泉・宿坊等）・名勝（庭園等）——の分布状況と保存の実態。

㊦ 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

㊧ 道・運河の歴史の意義・格・沿革。

㊨ 河川の歴史の変遷。

㊩ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

㊪ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

#### 四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道・運河ごとに分冊とし作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

## I 古戸・桐生道の概観

### 一、道の呼称と沿線の状況

桐生道は、旧境野村三ツ堀で足利道から分岐して渡良瀬川の松原渡しへ向かう。三ツ堀分岐点から松原渡しの間は、今日でも「太田街道」と呼ばれている。渡良瀬右岸の広沢から太田市熊野町の間は、古老からのききとりではどこでも「桐生街道」と呼んでいる。

しかし安永八（一七七九）年、高山彦九郎の「小俣行」には「くまの鳥井の前を経東へ行き北に折桐生道へ入る」とあり、熊野の追分から北は「桐生道」と呼ばれている。東金井の洞谷寺には道標が二つある。一つは正徳六（一七二六）年のもので「右ハ足利道左ハ丸山道」とある。もう一つは明和元（一七六四）年で「右阿しかか己ら、左き里ふみち」とある。この道標は、洞谷寺の位置からみて元来は熊野の追分にあつたのをここに移したものと考えられる。それはさておき、追分から北の道はここでも「桐生道」とか「丸山道」と記されている。おそらく江戸時代は桐生道であり、桐生街道というのは明治以降の呼称であろう。

追分から太田宿例幣使道との交差点までは「母衣輪道」とよばれていた。現在でも交差点付近の古老は「おふろわ道」と称している。

この交差点には、かつて太田宿の高札場があつた。ここから南へ入る道が「間の道」で、これが古戸道のはじまりである。古戸道は、中山道をへて江戸へ通じるので江戸道とも呼ばれた。古老は「古戸街道、江戸街道」とよん

でいるが、これも後の呼称であらう。なお古戸渡しの対岸、妻沼町では、この道を「新田往還」とよんでいる。

さて、往年の桐生道、古戸道は、街道というよりも田舎道であり、しかもかなりの悪路だったらしい。寛政十一（一七九九）年の記録は次のように述べている。

桐生より熊谷迄の間、誠に百姓の通路致す細野のみにて、渡場も多く街道筋の外故に、小川土橋、飯橋の修復も打届き申さず、ことに馬足の怪我等も御座候。時々荷物濡れ并濟等も相掛り、色々申し上げ難、臨時の運用等も相増し候云々

当時の道幅を示す史料を見ないが、現存する旧道ではほぼ原形を残すかと思われる所では、いずれも二・五メートル（一間半）である。

この街道筋には、新田堀をはじめその系統の用水路が多く、そのため橋も沢山あつたが、その保守状況は右の記録のようにあまり良好とはいえないようである。下広沢村の松原渡しの手前には新田堀があり、これにかかる橋は地元下広沢村を中心に、桐生新町や相生村方面、下山田方面の各村の助成によつて維持管理されていた。文久三（一八六三）年、下広沢村と桐生新町の地方役人達が主催した「新田堀橋普請奉加帳」には次のように記されている。

一 当村方往來新田堀御用水堀に掛り候橋の儀、去る年年洪水に流失いたし候に付飯橋にいたし置候處、近年川なみ次第にあしく相成、いささかの小水にも相流れ、その都度々々飯橋かけ置候得共、元より手薄に付、相たもち不申、往來差支に相成、一統難いたし候、右に付今度仕法相改、出水の節も相保ち差支に相ならざるへう丈夫に普請仕度候云々

寛政の記録から六十四年後でもこんな状態であった。

ところで、桐生道→古戸道は、下広沢村・丸山宿・太田宿・高林村の四カ所で、周辺諸地域へ通じる重要な脇往還と交わっていた。

下広沢村加茂神社の南方で、古戸足尾街道と交わる。地元の人が大間々街道とよぶこの道は、大間々町で銅山街道へ出る。大正十四年に綿橋が竣工するまで、洪水で松原渡しが使えない時の大間々町高津戸まわり桐生への迂回路でもあった。

丸山宿は、桐生道と旧東山道と推定されている伊勢崎・足利線との交差点に位置する交通上の要地であった。西へ伊勢崎街道（大原道ともいう）、東は足利道という要地を占める。「上州山田郡丸山郷之儀ハ、前々より御朱印御伝馬繼立候場ニ御座候ニ付云々」（明和三年文書）とあるように、太田宿を除けばこの街道筋唯一の宿場であった。高山彦九郎の安永八（一七七九）年「小俣行」にも「丸山ハ町並屋作東西の通也はたこや（旅籠屋）も見ゆ、宿の中小溝流る」と宿の景観を記している。また、渡辺華山の来桐を岩本家の者が丸山宿まで出迎えに行つたようですが「毛武游記」に「此山辺にうどん売ル家あり、岩本氏の紋つけたる提燈をひさしのもとに高うつなきて吾到ルをまつ」と記されている。

丸山宿からの継送り先を文化十三（一八一六）年の史料で見ると、南は太田宿、小泉村、北は桐生町、大間々村、東は足利町、八木宿、西は伊勢崎町、木崎宿、（藪塚）本町村となっている。

太田宿は、日光例幣使道十三宿の一つで、寛永二十（一六四三）年に宿駅の整備をし、正保二（一六四五）年に宿場に指定された。日光例幣使道は、同じ脇往還とはいっても当地方の幹線道路であり、太田宿には本陣、問屋、旅籠屋が設けられて、新田郡の中心的地位を占めた。

古戸道は、太田宿高札場から南へ向かい、やがて高林村で現在の高崎・館林線の脇往還と交差する。安永五（一七七六）年、高山彦九郎の「江戸旅行

記」にこの辺のようすが記されている。

高林村の内福嶋とて寒三軒の所有り、次に本郷と称する所の人家を経て少し下りて土橋を渡る。右ハ寄木戸古戸道 左リ館林街道を行く云々。

彦九郎は、小泉、館林を経て江戸へ旅したが、古戸道は南へ古戸河岸に至り、渡船で妻沼へ渡り中山道熊谷宿へ向かう。

## 二、渡良瀬川・利根川と渡船

### 1 利根川と古戸渡し

古戸渡しは、古戸・桐生道における最大の渡船場であり、江戸中期以後の桐生織物の発展にもない桐生新町の玄関口ともいふべき要地であった。

明治十七年測量の迅速図によれば、古戸―妻沼間の利根川は大きな中州を挟んで二流を成し、妻沼側が本流で古戸側の分流は蛇川と呼ばれていた。蛇川では明治十四年に有料の板橋が架けられたが、本流では明治十七年に有料の船橋が架けられるまで、もっぱら渡船で往来していたのである。

古戸渡しは、古くは長井渡しといわれたい。長井渡しのことは、治承四（一一八〇）年、足利又太郎忠綱が宇治川の先陣の時に、むかし足利が新田入道（義重）と組んで秩父と戦つたとき、長井渡しを馬で越した故事を語る中にも出てくる。（源平盛衰記）

「新編武蔵風土記稿」には「建久四（一一九三）年、頼朝武蔵国入間野にて追鳥狩せさせ賜ひ、直に下野国那須野へ赴賜ふとて、利根古戸の渡し掛り、三月二十七日当社（聖天社）へ参詣云々」とある。

また「古河志」には、建武二（一三三五）年八月二十日、下野国小野寺八郎右衛門顯道の着到状に「右於武蔵国長井渡、十九日馳参候事」と記されている。



I 古戸・桐生道の概観



図1 明治17年当時の利根川

「古戸渡し」という名称が文献に現われるのは、享徳五（一四五六）年正月、古河公房足利成氏が新田庄の岩松右京太夫持国あての書状に「…然者相拘古戸渡候者」（正本文書）とあるのが最初とされる。

ところで、古戸渡しに公的な渡船が始まったのは寛永十三（一六三六）年とされる。

妻沼村渡船之儀、文禄三年年（中略）近村作渡舟呼集め、御船橋にて、御神君様御通行遊ばしなれ候。其の後、寛永十三年三月、下は川俣、上は五料御関所の中脇往還に仰せ付けられ候時、御代官南條金左衛門様、大河内金兵衛様より、船新たに造立、御渡し遊ばされ候。（妻沼町誌）

このとき船五艘を造ったことが史料に述べられている。文化六（一八〇九）年にも五艘の舟があった。

- 一、渡船三艘
  - 長六間七尺
  - 横六尺五寸
  - 但馬四足立
- 一、小早船式艘
  - 長四間二尺
  - 横三尺五寸

また文政六（一八二三）年の史料には、馬渡舟三艘、歩行渡船式艘とある。慶応三年（一八六七）年には、妻沼側の渡船数は、馬船一、早船一、渡船三の計五艘であった。これらの記録から、古戸渡しは三〇年間にわたって五艘に限定され、人馬は別の船で渡されていたことが分かる。

さて、古戸渡し舟は、公的渡船開始以来、慶応三年まで、公式には明治十年まで妻沼村の一手持ちで行なわれていた。しかし渡船運営をめぐって古戸、妻沼両村間には何度か紛争が起っている。記録に残る対立は二回ある。

延享三（一七四六）年の争論では、古戸村の言い分には証拠がないとして「古来の通り目沼村渡船仰せ付けられ候」となった。

慶応三（一八六七）年の出入りでは、妻沼が古戸を訴えた。古戸が作場通船を使って貨銭を取る渡船を始め、妻沼川岸へ漕付けてくる。新しい番小屋を建てて、古戸村渡船場という大きい掛札までかけている。従来通り古戸川岸へ船を着けても上陸を妨害するので漕ぎ戻すありさまで「御用渡船差支者不申及脇往還難立不相成」というわけである。

古戸側は反論している。利根川はいま古戸側の蛇川と妻沼側の本流とに分流しているが、もとは一本で両村の中央を流れていた。したがって渡船も妻沼一手持ちではなく両村の持合いでやっておき、上州側では「古戸之渡」武州側では「妻沼村渡」と称していた。利根川が二流になったのは、利根本流は妻沼で、蛇川は古戸で渡すようになった。利根川が一本のときは古戸に間屋場があり、上州筋からの荷物はこゝへおろし、妻沼渡船を呼び寄せて積立てていたが、利根川を分流させた洪水によって間屋場は流失してしまった。

そこで問屋場を蛇川堤の外へ移したが、ここで妻沼渡船場とは六百間(一、〇八〇メートル)も離れてしまい、船を呼び寄せる声も通らなくなつた。これ以後、諸荷物等は蛇川と本流との合流点を回送して妻沼へ直送したが、旅客は水難を恐れて蛇川を渡し、中州に上陸させて利根川べりまで歩かせ、そこで妻沼渡船を呼び寄せて渡らせた。古戸村は、金山献上松茸や新田大光院様その他公私旅行の継立を行なう臨往還の重要な継場であり、蛇川渡船は古戸が一手に行なつて来た。このことは文久元(一八六一)年、評定所役人の川筋検分の節にも御請書を差し出してある。つまり、分流以後の蛇川渡船は古戸が行なつて来たことを主張した。妻沼側こそこの蛇川の存在を故意に隠し、あたかも利根川が一本の流れであるかのようにいい立てて渡船を独占しようとしている、と批難している。(天田市史)

この争論は解決をみないまま維新を迎えたらしい。明治三年七月から翌年正月までの七カ月間、古戸渡船場のあげた収益は九十九両余と銀百七十貫余という。古戸道の交通量と争論の背景がうかがえる。なお、明治十年には両者の話し合いが付き、蛇川は古戸村、利根本流は妻沼村で渡船を行なうようになった。明治九年調べによると、妻沼村渡船の運賃は、十六才以上男女一人金八厘、牛馬一匹金八厘であった。

## 2 渡良瀬川と松原渡し

桐生道は、境野と広沢の間を流れる渡良瀬川を松原渡しによつて越える。高山彦九郎は安永四(一七七五)年七月、忍山鉱泉入湯の折に松原渡しを通つた。

下広沢を出て鎮北へ行きて松原の渡し也、是下広沢村の中なり、渡しのごた下田堀の渡渡瀬川に分る、爰を歩渡りす凡そ三十間斗り也、渡りて綱越しにて渡瀬川を渡る、川幅凡そ惣一斗北へ渡る也云々

「綱越し」というのは、ろや棹を使わず、兩岸にわたした綱を引きながら

船を動かすもので、これより約五、五キロ上流の「赤岩渡し」や下流約三、五キロの「葉鹿渡し」でも同じ方法で船を渡していた。彦九郎の「小股行」(安永八(一七七九)年七月)には

□□渡瀬川の浅瀬をわたる、川原を経て舟わたしつなごし也、ここを葉鹿のわたしと号す

とあり、また「忍山湯旅の記」には、「渡瀬川赤岩にて綱越しにて渡る、西へ流る川幅せし」と記している。

松原渡しの記録はないが、赤岩渡しの万延元(一八六〇)年の記録では「夏秋は渡船・冬春は仮板橋相掛」とあり湯水期には簡単な板橋をかけていたことが分かる。もともと渡良瀬川の流量は、夏でもそれほど多くなく、中州を狭んで分流する所では徒渉できる。彦九郎は小股行の帰りに桐生川合流点の少し上流で徒渉している。

これ松原と葉鹿の間のちか道なり渡口にあらず、千取川(菅堤の人)子が手をとりとてわたらしむ、石川にして瀬早し、わたせ川二瀬こゆ云々

松原渡しの規模や経営については不明であるが、桐生新町、下広沢村や下田地方各村がその運営に関与していたとみられている。

渡良瀬川は、また荒れ川としても有名であり、梅雨期や台風期には当然川止めがあつたはずだが、これを知る史料はない。

## 三、物資の輸送路

### 1 太田金山献上松茸

金山には例年、秋彼岸(旧暦八月下旬)ごろから十月にかけて、山中四〇カ所ほどに松茸が生えた。寛永六(一六二九)年、当時の領主館林城主松原忠次が、三代將軍家光に贈つたのが献上の始まりと伝えられる。これ以後金

山には「御山守」三人がおかれ、寛文元（一六六一）年にはそれに代わって「御林守」二人がおかれ、元禄元（一六八八）年には金山は徳川家の御用林に指定された。

松茸の時期には金山は御禁制の山となり、山中には多くの番小屋が設けられ、山守り三人、林番五四人が昼夜巡回して毎日本数を記録した。金山に発生した松茸の本数は、寛政元（一七八九）年から文化十二（一八一五）年までの二十七年間の記録では合計四一、三八三本、年平均一、五三二本であった。この間、最少は三八二本、最高は二、八九二本である。

献上ははじめ年三回、のちに七回となったが、発生状況によって変動があったらしい。献上の前日には宿々へ先触れを出し、輸送当日になると御林守の家に運び、目代（山守り）立会いのもとに籠につめ、老中の証文を添えて昼夜兼行の宿継ぎで江戸城へ送った。

輸送順路は、太田から古戸、妻沼、熊谷、鴻巣、桶川、上尾、大宮、浦和、蕨、板橋まで合計一〇宿である。太田を巳の上刻（午前九時ごろ）に出発、古戸道を南下し同中刻（十時ごろ）に古戸村着、利根川を渡船で渡り、翌日卯の上刻（午前五時ごろ）江戸に到着した。二日がかりとはいえ、実時間は二〇時間という早さであった。この松茸道中は、万石大名と同等の格式であったという。なお、松茸採取に関する費用は、太田宿近辺の村々が石高に応じて負担していた。

古戸道の重要性は、献上松茸の輸送路であることよって高められていた。沿線の河川、道路工事の陳情に当たっても、しばしば「御献上御松茸」という文字が用いられた。また、慶応三年の古戸・妻沼渡船出入りにおいても、両者ともこの文字を出して自村の重要度の根拠としている。妻沼が「脇往還継場等二而太田金山御松茸并新田大光院様、其余御用旅行等従来継立無御差支右渡船仕来云々」といえば古戸も「当村之儀者脇往還継場之儀二付（中略）太田金山御上納御松茸御用・新田大光院様其御用御旅行之分、北者同国太田

町兩者訴訟村方江継立云々」といったぐあいである。金山献上松茸の名は、大光院とともに、徳川家すなわち権力のシンボルとして使われた。

## 2 桐生織物

古戸・桐生道の経済的価値は、献上松茸の輸送路ということよりも、江戸と織都桐生とを結ぶ産業道路としての側面にある。

桐生織物は、十七世紀末の貞享一元年頃には江戸と京都へ商圏を拡大する。享保七（一七二二）年には三井越後屋の桐生店ができる。同十六（一七三二）年には桐生絹市の市日を変更して大間々絹市の地位を奪取する。

元文三（一七三八）年、西陣の高機織法の導入によって桐生織物は急速に隆盛へ向かう。導入から三年、早くも製品は京都に進出し、西陣機業に恐慌をもたらし、導入から五年、寛保（一七四一―四三）頃には、既に縮緬・絹・飛紗綾・紋紬・竜紋等の新規織物を産し、京都・江戸はもとより地方各地から注文が殺到するようになった。桐生絹市は紗綾市とよばれるようになり、紗綾絹だけで十万五千反の産額をみるに至った。

一八世紀後半の明和から安永、天明にかけて、桐生の商圏は西は近畿、北は蝦夷・松前にまで拡大した。天保二（一八四一）年の長沢日記によると「一ヶ年分凡七拾万兩 内凡金三拾五万兩程江戸取引 凡金三拾五万兩程諸国取引云々」とあり、江戸が取引額の半分を占めていたことが分かる。

桐生織物の江戸への輸送路には水陸兩路があった。水路は、渡良瀬川の猿田河岸（足利南東）から積み出した。しかし織物の安全な輸送をはかるため、水運よりも宰領つき添いの駄馬による陸路が中心であった。つまり松原渡しから古戸・桐生道を輸送路としたのである。

桐生新町には、織物運送のために十七屋（後に京屋）と烏屋という定飛脚問屋があった。天保七（一八三六）年の記録によると、烏屋は五・十三・八の日の翌朝出立、京屋は四・九の日の翌朝出立、両家合わせて月々の出入

りはそれぞれ一八回であった。一回の積荷高は、月六齋の一日平均で五駄、正月の初荷では二五駄以上、多いときは二〇〇駄以上という多量なものであった。古戸・桐生道は、まさに北関東のシルクロードといっても過言ではないであろう。しかし、寛政十一（一七九九）年の記録によれば「桐生より熊谷迄の間、誠に百姓の通路致す細碎のみにて、渡場も多く街道筋の外故に、小川土橋、飯橋の修復も行届き申さず、ことに馬足の怪我等も御座候。時々荷物濡云々」とあり、交通の質・量からみて不思議なほどの悪路であった。

#### 四、文化の伝播路

文化といういとなみが、人から人に直接伝えられて発達するものであることは、今も昔も変わらない。脇往還の田舎道とはいえ、織都桐生と文化の中心地江戸とを結ぶ古戸・桐生道は、米桐する文化人や文化を求めて江戸へ上る人々が往来した道でもあった。

桐生における文化の胎動は宝暦、明和のころに始まり、文化、文政以後に急激な発展をみるに至った。まさに桐生機業の発展と軌を一にしている。つまり桐生文化を支え、担い、推進したのは織物の買次商や機屋など機業関係の旦那衆であった。彼らは本業のかたわら漢詩、和歌、書道、絵画、俳諧、狂歌の一芸や二芸は余技として楽しむゆとりをもっていた。

桐生織物の全面的発展にともなうて、江戸をはじめ京都、大阪などの文化先進地との交通が盛んになり、その文化も流入するようになった。豪商をはじめ一般町人の経済的向上がその文化の受け皿となっていたのである。

安永二（一七七三）年、二度目の米桐をした弘前の俳人建部涼袋は、当時の桐生の様子を「葉葉齊道ゆきぶり」に活写したという。

此桐生のさとはおくらりたる山辺なれども、むかしより機おるわざにとみて、今は都の手わざにもまさるるばかりなりといふ。さるは、都よりあき人どもの

多くいっつとひて、此あづまおりのきめどもおほくもとめ行に、市もいとにぎびて云々。

上方商人が多数出入りしていた人間模様がかがわれる。同様のことを高山彦九郎も記録している。（安永四年、『山邊旅の記』）

上方の人売買の利を得んが為めに多く入り込む故上みの風を少しくまじぬ……

おそらく人々の行動や町の景観に、旅人の目にそれと分かる関西風のおもむきが感じられたのであろうが、その痕跡を確かめることは今回の調査では果たせなかった。

しかし、桐生文化の萌芽を成した寺子屋「西野塾」（明和・寛政）の創始者、西野常庵は、桐生に東遊した京都の浪人であった。漢籍、国学に通じた常庵は、桐生においてはじめて漢学・国学を教授した人であり、四〇余年間にあたる西野塾の門弟は数百人におよび、彼らが後の桐生漢学・桐生国学の荷ない手となったのである。

桐生漢学は、長沢紀郷の経学を除けばすべて漢詩であった。これを興隆せしめたのが豪商佐羽淡斎で、彼が詩塾「翠屏吟社」を起し、山本北山の門人館約を江戸から招いて塾頭に据えてから桐生漢詩界が勃興したのである。長沢紀郷（買次商）は和漢に通じ、塙保己一や橘千蔭、角田無幻等々と交友したといわれる。

桐生の国学も和歌・和文の歌文中心であった。国学は、先の西野常庵と宝暦年中に江戸より米桐し境野に漢学塾「物部塾」を開いた物部古道が桐生における最初の教授者であった。これを隆盛に導いたのが星野貞碑（買次、機屋）で、さらに桐生国学の全盛をもたらしたのは武州幸手に住し桐生に往来した伊勢の人、楠守部であった。守部を庇護したのは歌人吉田秋生（機屋）である。

俳諧は、宝暦から安永にかけて、蕉門系の俳人建部涼袋の指導によって急

激に隆盛した。涼袋は既述のように三度来桐している。

絵画においてもまた桐生は独特の町であった。画家、蘭学者として有名な渡辺華山の妹茂登が、桐生新町の買次商岩本家へ嫁していたという特別の縁故地である。その関係で華山は三度来桐している。第一回は天保二(一八三一)年十月十二日、中山道熊谷宿から妻沼、太田を経て夜十時に岩本家へ到着した。第二回は天保五年十月、第三回は翌天保六年八月であった。一回目の旅の紀行文が有名な「毛武游記」である。このように華山との関係が深いにもかかわらず、彼の門弟は岩本家四代当主岩本一徳ただ一人であり、桐生画壇は谷文晁門下の南宗画家でしめられていた。ただ桐生に画幅愛蔵家が多いのは、豪商の輩出とともに華山の桐生来遊の影響が大きいだろうといわれている。

桐生の書家長沢如水は、林大学頭信充の門に学び、書家東江源鱗に師事している。また桐生の華道は、江戸の人秋月庵宗野の二十年間にわたる教授によって扶植された。

このように桐生の文化は、江戸や上方の文化人によって移植され、且那衆が発展させたいわば業余の学であった。彼らは師を招くばかりでなく、自ら東都へ上って当代一流の学者、文人に師事あるいは交友していた。

さて、一方、利根川の対岸妻沼には「江戸繁昌記」の筆禍によって江戸を追われた儒者寺門静軒が万延元(一八六〇)年に住みつき「両宜塾」を用いて経学を教授した。太田付近からは、新田勤王党の領袖、太田宿本陣の橋本正誠らが古戸渡しを越えてここに学び、また静軒宅を幕史の眼をさける密議の場に使化したといわれている。

また、太田・桐生における茶道の歴史は、室町時代末期天文年間、金山城主由良成繁が、千利休の師匠であった武野紹鷗を金山城へ招いて教えを受けたことに始まる。この間の事情は「新田金山記」に記されている。

斯に天文年中成繁朝臣の時(中略)京都より新田庄金山城に下着在りし走

り來の武野從五位下因幡守仲村と云ふには(中略)茶道を習字し茶道の術を伝え、後に華製して紹鷗と号し、南宗寺珠光の後は、紹鷗を以て茶家の正統とす、則千利休の師なり、是を成繁朝臣仲村を暫く金山城に止置き茶道を習字し玉ふ、成繁殊に茶を好み玉ひ桐生城へ移り玉ひても専ら茶道を慕ひ玉ふ、天正四年桐生城にて薙させ玉ふ大海傍優口の蓋、其外茶器今由良家に伝ふ云々。

紹鷗が古戸渡しから金山城へ来たかどうかは定かではない。

以上、桐生を中心に概観したように、古戸・桐生道は織物と松茸の輸送路として重要であつただけでなく、中央の文化を地方へ伝達する文化の道でもあつたといえよう。

## 五、往来の実態

脇往還の古戸・桐生道には、大名、奉行等の華やかな往来はなく、また例幣使道や銅街道のように本陣やにぎやかな宿場もなかった。当時の往来の実態はよく分からないが、以下旅行者の日記その他から通行の状態をのぞいてみよう。

### 1 通行の状況

この道の通行量や通行の状況を語る史料は少ない。既述のように桐生の定飛脚問屋鳴屋ならびに京屋の江戸との発着は、両者で月にそれぞれ八回であつたから、日に一回は飛脚の通行があつたわけである。

文久三(一八六三)年、松原渡し手前の新田堀橋の通行状況は次のように記されている。

右橋の儀は御用飛脚は勿論江戸往返干要の場所にて昼夜にかぎらず人馬往来の右利に候云々

夜間も通行があつたことは、渡辺華山が松原渡しを渡って桐生新町へ着い

たのが夜十時であったことからも分かる（毛武游記）。また、文化六（一八〇九）年の妻沼村渡船文書にも

天明三年砂降り以来、川瀬以ての外悪寒、夜中の通船至って危うき故、暮六つ時よりは艇に往來つかまつらず云々

とあり、利根川でも夜間の往來が行なわれていたことが知られる。桐生と江戸との一泊二日行程からして帰りは夜になる。この道が、先に述べたような悪路だったとすれば、夜間の通行は大変なことであったろう。それにしてもこれらの史料は、幕末期の古戸・桐生道が相当の通行量をもっていたことを示している。

## 2 『毛武游記』

童社の獄で有名な画家・蘭学者渡辺華山は、妹茂登が桐生新町の買次商岩本家三代茂兵衛に嫁していた関係で、桐生に三度来遊している。「毛武游記」は、天保二（一八三一）年最初の来桐に際し、江戸を出発した十月十一日から三十日までの紀行文である。

毛武游記 十月十二日の条

熊谷より妻沼まで凡三里これは利根川に沿ひたる村なり村家しげくたてて駅女きたり八聖天の社の守護靈ありと壯嚴なり、酒店に飲す此店吸物はかも、うどんをうく、魚類すくなく、江戸より登る魚は熊谷此わたりをよかばし、一里太田といふ処にいたり又飲す、鯛の切身あつものなり風よよいきはげし、此あたり常州より魚米冬は鯛ひらめあわびたこ、かこかくのおこ北風はげしきをもて、鯛をつくのひかへらんといふ聞かず、太田は例幣使道をもて此駅にとどめんとするものなり、新田金山に出る此山むかし新田義貞の城ありし処とて山は高からざれども名はいと高う聞ゆ、又万葉にも見えし山なればもとより靈山にありしや、皆松ばかりにて日暮いとさむし風はおどおどしく吹て風籠をものりはなししやとりたりとくる、かこかくのおこも弥助も格庵もあなどり来ぬらんかげに見えず、瀬ヶ丸山といふに到ルかな山につづきたる山にて万葉

にも見えしとぞ、此山辺にうどん売ル家あり、岩本氏の紋つけたる提燈をひきしのもとに高うつなきて吾らルをまつ、到れば甥喜太郎小父の左官助次郎出て、岩本のこもして今家もちたる喜八三つ待わびて帰りもせんと躊躇せし処にいたりしかばいとよろこびによろこびて持来りし酒を開き行厨をときて旅の勞をなぐさむ、精儀僕弥助退み来これよりかこ喜太郎のをせさきへや喜八助次郎に導きをなましめ成半過る頃桐生の町に入る、この入らんとする手前川あり渡瀬川といふ、渡を松原の渡しといふ三つ堀・境井野、小屋原常木等風一里弱桐生の町に入（以下略）

## 3 高山彦九郎の紀行文

高山彦九郎は、延享四（一七四七）年五月八日、新田郡細谷村（現太田市細谷）に生れ、勤皇の志士として全国を馳けめぐり、寛政の三奇人といわれた。その足跡は東北地方から九州にまでおよび膨大な日記、紀行文を残している。桐生道に関するものには「忍山湯旅の記」と「小僕行」の二つがある。

「忍山湯旅の記」安永四（一七五五）年七月二十九日―八月十三日

米山薬師を東に見へ左りに山を見て北へ行き吉澤村人家西を山にして東を新田堀の本流れて清き里也、猶北へ行きて人家を離れ左り堀の向ふ岩山もとに石の小祠あり石神明神と号するとぞ、火打石出づ、此石他國へ出たす事神明の禁すると（言伝ふ）、惣して此石を取りて事を神の好み玉ハすや、近年堀普請に役せられし人伝ふに岩屋へ入る石を以て彼火打石を打破らんせしに岩崩れて其人死せりと云ふ、道々見るに物すく暗き所也、是れる二三丁をさかのばりて新田堀を土橋にて渡る、此所堀東に遠かる也、唐澤人家を経て里統き一本木村此辺石道石道名里柄吉澤ふおとれり、下広澤村左り老丁斗り入りて山の下に社有り、鳥井東に有り、正一位加茂大明神と額に書せり、是れる社前まで石を布く、社東向殿五間半に二間茅葺三神也、本（宮）こけら真面社は板葺也、本宮凡ソ窓間四方神垣六間に五間也、森買木茂けし、社の後は山地、北の方に社家有り飯塚多宮と云ふ（中略）別當も眞言宗にて法樂寺とて有るの由

也、此地も山田郡にて當村上毛十二社の一ツ也、社領とて別にあらず社地も山に至りて三丁(斗)りの除地(と)云ふ、下広沢村□□□の所也、社家へ十二御御酒として献す、叔父も同じ、道わたの酒店に腰打懸けて中食し酒など飲みて七ツ時分以下広澤を出でて猶北へ行きて松原の渡し也、是下広沢村の中なり、渡しのこた新田堀の源渡瀬川に分る、爰を歩渡りす凡そ三十間斗也、渡りて網懸して渡瀬川を渡る、川幅凡そ斗北へ渡る也、境野村を経て桐生新宿に至る、左右の人家皆ナ糸織を以て業とし、身の前小溝流る水車を以て、桐生家を引はて糸をくる、皆異なる業なり、人の身ながらむむとむむとからず、わきて女は常に緋織る業を以て戸外に出る事希れなれば色つむむと又悪しからず、是れ程なく新町也、入口東の方へ行道有り是れ足利への通路也、行程三里大間々へは二里と云ふ、新町は南北への通り也六丁斗り人家多し、町の中溝流る、是れも水車を以て糸をくる、高家多し、鳥山此所迄三里余細谷村(より)凡そ五里細谷鳥山迄ハ丑の方へ来る、郷戸萩原辺迄も同じ、其れ桐生まで北とさして来る也、新町の中右の方市神の社有り、社前に(鞠場)□□有り、此(所)さや、楯櫓りんずとんすりうもんなこ棚はた等多く出るを以て繁花にして人騒者の風有り、上方の売買の利を得んが為めに多つ入り込む故上ミの風をも少しくまじゆ、上毛は絹を多つく出す所といふわきての辺多し、凡そ四時半はつくのふと云ひ伝へたり、新町の市三七の日なり、町の出口左り天神の社島井有り、渡りて社有り、左りに観音堂石鐘つき堂天神の社大イ也、拝殿を入りて拝す、時に暮六ツ時也、通りへ出でて天神宮の島井有り、新町を忍山へ北へさして行く(以下略)

『小僕行』安永八(一七七九)年七月七日の一日。

「太田駅札の辻に出ツ、ここに到全く明けたり、くまのの鳥井の前を経東へ行き北に折桐生道へ入る、雨金井を左見猶北をさしてゆく、右手宿金井左金山によりて家居し或高く或低く地勢によつて居る、是を入金井と号す、今泉に至る、溝流し、八田塚村を経れハ道の右延命地藏堂あり、子幼成りし時丸山をここを経金山に入りしと覚ふ、猶北にゆき丸山に至る、太田を桐生新町迄二

里半と、金井を是迄至りてきて来る、丸山ハ町並屋作東西の通也はたこやもみゆ、宿の中小溝流る、西に米山薬師堂建ツ(以下略)

#### 4 札所めぐり

江戸時代中期以降には、観光・レクリエーション化した社寺参詣が盛行した。しかし、西国への旅は困難なため、関東地方には坂東三十三番札所とか秩父三十四番札所が設けられたが、これにも出かけられない人々のためにそのミニチュア版札所が各地につくられた。

古戸・桐生道の沿線には札所が三つあった。「東上州新田秩父三十四番札所」(宝暦三年の史料)は母衣輪道から桐生道沿線に設定され熊野の無量堂、金井の玉岩寺、今泉の曹源寺、一本木の東沢寺、唐沢のえんま堂、吉沢の蘭田堂、丸山の清光寺、矢田堀の瑞岩寺が含まれている。

「東上州三十三番札所」(宝永五年の史料)の二四番―三二番は、広沢から桐生市内に分布する。

〔準西国三十三所〕(明治三年史料)には太田宿の受樂寺、飯塚の觀正寺、小舞木の田用(養)寺、飯田の靈雲寺、新井の重(十)輪寺が古戸道沿線に配されていた。

札所めぐりは、農閑期の四月初旬に、婦女子が御詠歌を唱えながら歩いたのである。

## II 道の確定

### 一、道の確定

#### 1 古戸渡しから太田宿へ

古戸川岸から古戸道が始まる。古戸道という名称は通常この古戸川岸から太田市本町通り足利銀行太田支店東の十字路までをいう。石田川の橋のた



石田川（手前）と利根川の合流点



太田—熊谷線

もとから川岸集落へ下りて行く道が旧古戸道である。原形はカギのてに屈曲していたが、明治年間に現在の直線道に改修された。石田川（江戸時代は蛇川）を渡る古戸渡しの渡船場は古利根橋より少し上にあつたらしい。また古戸河岸は、刀水橋と堤防とが交わるあたりであつたといふ。

川岸集落の旧道はすぐに主要地方道太田・熊谷線に入る。ここから飯塚までの約四キロは、四車線の太田・熊谷線と一致し、それに吸収されて旧道の跡形も見られない。高林の交差点から西矢崎の交差点を過ぎると、左手に富士重工の工場、右手に市民プールへ行く交差点になる。この次の飯塚三差路を右折する。右折したとたん左へ入る道が旧道である。まもなく右側に小公園が現われるので、公園に沿って迷電塔の並ぶ広い道へ右折し、次の十字路を左折する。本来の旧道は、公園の角を曲らずそのまま直進していたが、約一〇〇メートルが都市計画で消えた。

十字路を左折したらまっすぐ北へ上る。太田駅南口のスーパーユニーにぶつかったら店にそって曲り、太田駅西の東武線地下道入口へ出る。飯塚の交差点からここまでの間、すっかり都市化してもはや昔日の面影は感じられない。地下道を潜り抜けるとすぐ左の狭い道へ入る。まもなくT字路になるので右へ行き、南裏通りとの十字路を過ぎると足利銀行東十字路タバコ屋の角へ出る。地下道からここまでの道が間の道である。

#### 2 太田宿から松原渡しへ

太田宿からの旧道はこの十字路から始まる。例幣使道太田宿の宿通りと古



## II 道の確定



太田宿、間の道入り口



足利銀行太田支店東、母衣輪道

戸・桐生道と交差する。この十字路には、かつて高札場があった。十字路から熊野の追分までは「母衣輪道」と呼ばれるが、町の古老は「おふろわ道」と称している。十字路を北に入る幅二・五メートルの一方通行の道が旧道で、これはすぐ北裏通りと丁字路になる。そこを左折した先が三差路になるので右折すると太田女子高校校門につき当る。敷地沿いに北へ進むと大通りと交差するが、そのまま約三〇〇メートル行くと金山町の丁字路になる。旧道は、ここを右折した幅二・五メートル、車輛進入禁止の狭い道である。これは一〇〇メートルほど広い道路を越えて熊野の旧道へ続く。熊野町内の旧道を九〇メートルほど行くと桐生と足利の分岐点、熊野の追分へ出る。ここは変則四差路になっている。これを左折して国道二二号線へ入る。ガソリンスタンドを過ぎると食堂があるのでその角を左へ入ると再び狭い旧道になる。この地点からガソリンスタンドの間の旧道は水田になって今は



東金井の旧道



丸山宿通り、西から東を望む

ない。ここから約九〇〇メートルの間は、舗装されていないが旧景を残している。やがて南金井の丁字路につき当る。旧道はこの先へ亀山の切り通しまでのびていたのだが、今は廃道になっている。

旧道は、切り通しの所から左へ亀山の山際へまわりこむ。この部分は未舗装で、最もよく旧状をしのばせる。山裾から再び国道へ出るとすぐ「金山自然公園入り口」の看板が建つ交差点になるから、これを山側へ左折する。曲つたらすぐ右折して旧道へ入る。幅二・五メートルの旧状をとどめる屈折した道を三〇〇メートルほど行くと国道へ出そうになる。ここを国道へ出ないで左折し、大栄工業の角を右折するのが旧道。これはやがて丁字路になるので右折すると、前方に曹源寺さざん草堂が見える。再び国道へ出て一〇〇メートル弱、電気屋の手前を左に入る。畑の中の旧道を二〇〇メートル余進むと数軒の集落につき当る。旧道は集落を通り抜け、細い農道になって国道を斜

めに横断する。しかし、今泉口から来る道との交差点以南は廃道で、それより北へ幅三メートルの旧道が矢田堀へのびる。この辺も旧景のおもかげがある。やがてT字路になるので左折すると、またすぐに国道と合致する。

約三〇〇メートルで旧道は毛里田中学校入り口へ入って行く。ここは車輛進入禁止。毛里田中の西側を通り、伊勢崎・足利県道を越え、大円寺を過ぎると丸山の宿通りへT字路で交わる。これを左折すると、前方に丸山が見える。国道との交差点を越えると、宿通り左側に沿う水路の南側にもこの道と同じ幅の空地があり、かつての宿場集落の面影をとどめている。

この空地に火の見やぐらが建ち、相向かいのタバコ屋角から右へ車一台分の道へ入る。やがて三差路状になるが、旧道は水田の中を過って国道へ抜ける。毛里田中学校からこのあたりまで、旧道の霧<sup>うら</sup>閉気をよく残す。国道を五〇〇メートル弱行くと、旧道は右へ斜めに農道として分かれる。吉沢のところで国道を横断するとすぐまた三差路になり、ここを右折して再び国道に出る。人家のとぎれた所から旧道は左へ入り、新田堀に沿って山裾を約一キロ走る。採石場の先で国道と合わさり、ゴルフセンター入り口の所で右折したとたん左へ入る道が旧道。これもまたすぐに国道へ出る。太田、桐生の市境を過ぎると、まもなく右手に本田総合設備がある。旧道はその左側へ入る。坂を上って進むと、また国道へ下りる。国道はこの先でバイパスと合流する広い交差点になる。旧道はここを斜めに横切っているが、今はガードレールでふさがれて通行できない。国道を直進して、歩道橋手前の狭い道を右へ下りていくと、旧道の続きへ出られる。旧道は再び新田堀と並走するが、最初の十字路を右折する。曲がると前方に渡良瀬川の堤防が見えて行き止りになる。かつてはこの河原から「松原渡し」を綱越して対岸の境野へ渡った。今その面影は全くなく、すぐ上に待矢場用水太田頭主工の立派なゲートが築かれている。



吉沢 新田堀沿いの旧道



松原の渡し付近（現、待矢場用水取水口付近）

### 3 松原渡しから天満宮へ

境野中の南一〇〇メートルほどの渡良瀬川川岸が、松原渡しの境野側であったと思われる。ここより境野中、境野小の南西端に沿って北上し、境野小西門より三〇〇メートルほど先の信号を抜けて、すぐの小路を右折すると白滝神社の北に出る。白滝神社より一五〇メートルほど北西に進むと、小さな右カーブの先で国道五〇号線につきあたる。ここからは足利道と合流している。国道五〇号線を左折し、二〇メートルほど先の三差路を右方に入ると、現在では裏道となっている小路を約五〇〇メートルほど行き、桐生中央信用金庫のところまで再び五〇号線に出る。

ここから四〇〇メートルほどは五〇号線に沿い、交番のある変形四差路を右前方に進む。はじめ右に本然寺、つづいて左に小工場群を見て八〇〇メー

## II 道の確定



桐生本町通り (旧、桐生新町)



桐生新町の始まるどころ 天満宮前

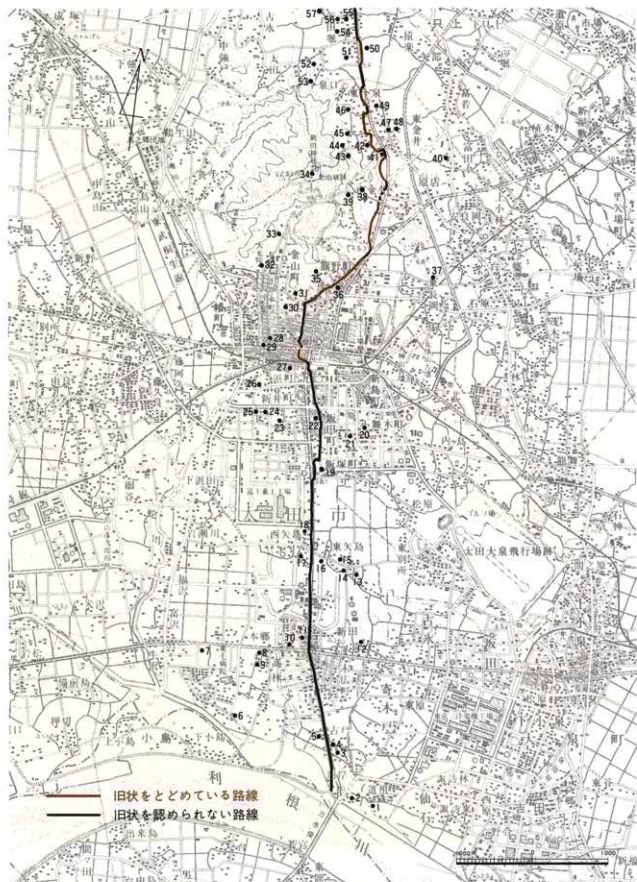
トルほど行くと坂口接骨院角の十字路に出る。ここをさらに北西へ三〇〇メートル直進するが、反対方向の自動車一方通行路となっている。一方通行路が切れたところの信号を抜けてすぐ、みのやフロン店角を左折(西進)し、二五〇メートルほど繁華街を行くと本町通りの新川袂のところに出る。右折して新川の盛運橋を渡り、桐生で一番にぎわう本町通り(旧桐生新町)を二キロほど北上すると、つきあたりが天満宮となる。

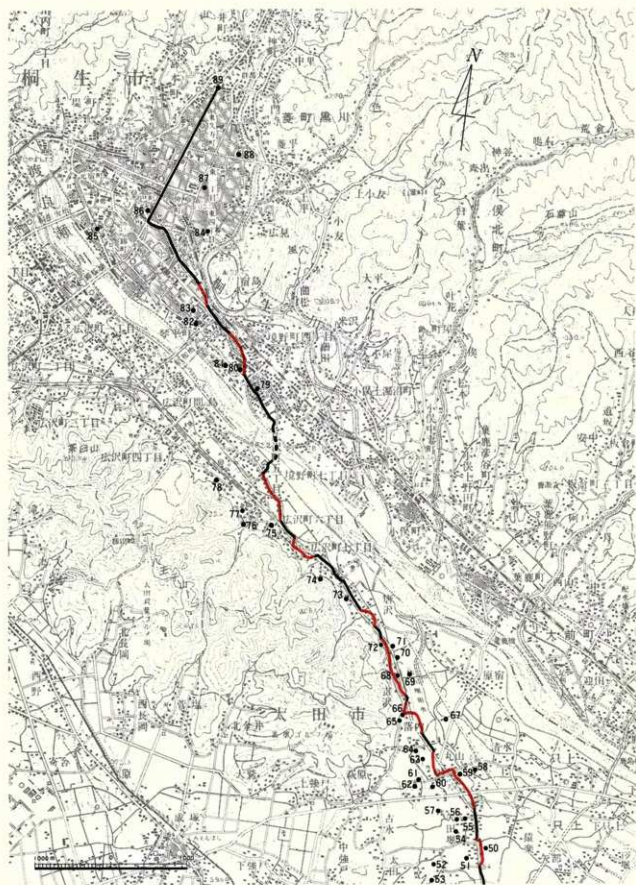


## 二、沿線地図



## II 道の確定





一、古戸渡しから太田宿へ

石田川古利根橋たもとの堤防から主要地方道太田・熊谷線まで川岸集落の中を直線状に走る旧道は、明治年間に改修されたもので、本来はカギのてに屈曲していた。川岸の集落も何回かの利根川改修工事によって大分変わっている。かつての古戸河岸は、刀水橋と堤防との交点付近にあったという。古戸渡しも古利根橋の少し上で蛇川（今の石田川）を渡ったらしい。古戸の長良神社は、明治四三年大洪水の時には古戸渡し近くの蛇川べりにあったのを移している。

堤防から下りる坂道の途中を右へ入り、太田・熊谷線をガードで潜りぬけると泉福寺の門前（2）に出る。門前にはみごとな如意輪観音像をもつ二十二夜塔明和元（一七六四）年、門の内側に文字塔としてはこの沿線有数の立派な庚申塔享保十九（一七三四）年がある。境内にある奉書写大乗妙典一字一石塔宝永三（一七〇六）年は、沿線の一字一石塔の中で最も美しいものといつてよい。とりわけ三面に二体ずつ浮き彫りされた六地藏の姿は、芸術的香気を漂わせる。右面に修羅道教主、畜生道教主、左面に天道教主、人道教主、裏面に地藏道教主、餓鬼道教主と六道を刻み、各々に地藏像を配している。境内にはこの他多数の石塔類がみられる。

寺の東に台地が見える。十六世紀末の利根川はこの台地直下を流れたらしい。台地上は字城内といひ、岡山氏の拠る城であった。利根川に臨む要害岡

III 古戸・桐生道の現状と文化財

れない。



泉福寺一字一石塔

山城は、天正十八（一五九〇）年秀吉軍に落されたという。今、台地から古い堤防が突き出ているが、文禄三（一五九四）年に築かれた「文禄堤」の残片かも知

太田・熊谷線は、旧道を含めた所から古戸集落へゆるやかな坂を上りながらカーブする。坂を上りきって右側、道路より一段高い所に墓地が見える。火の見やぐら角を右へ入ると古戸の赤城墓地である。馬頭観世音安政三（一八五六）年の台座が道しるべで「東小いづみ 南くまかえ 西太田 きり生足かが」と教えている。この東に無住の宝竜寺があり、南から入る参道脇に明和三（一七六六）年の地藏像が建っている。高さ二三四センチ、太田で二番目に高い立派なものである。高さだけでなく、均整のとれた姿といかにも温かなその風貌とは、この沿線の地藏像の中で最も印象深いものがある。

宝竜寺の十字路を国道から西へ入り、八瀬川を越えてさらに西へ進むと一キロ余で高林不動堂に着く。この建物は高林南集会所を兼ねており、中に不動明王像享保十（一七二五）年が安置されている。高さ二〇〇センチ、石製

でみるからにたくましい風貌をしている。別名ヤキモチ不動ともよばれる。国道を一・二キロほど北進すると高林の交差点になる。ここを左折して三〇〇メートル余、電気屋の角を右へ入るとすぐ右手に地藏堂がある。堂の中



岡山城跡と古堤

の地藏像宝水三（一七〇六）の台座は太田市内最古の道しるべで「南古戸道 中館林道 北太田道」とある。地藏堂の西側にある如意輪観音像二十二夜塔明和八（一七七一）年も道しるべを兼ねて「右こいつみ道 左おふた道」と記される。

八瀬川をこえて酒店斜め前を左へ入ると、巨木の茂る大きな屋敷が見える。かつての代官屋敷（富沢氏<sup>(8)</sup>）で、建物は新しいが、屋敷の北側には土塁が現存している。この南に長勝寺がある。寺の南側



道しるべ

に庚申塚があり、この街道筋で唯一の百庚申がある。万延元（一八六〇）年の造立で九〇基が現存する。この隣に化粧地藏とよばれるお堂があり、現在も近隣の人々



高林の代官屋敷



朝子塚古墳



道しるべ

の信仰を集めている。高崎・館林線をさらに西へ行くと、左手に県史跡朝子塚古墳が現われる。これは前方後円墳で全長一三三・五

メートル、後円部の前方後円墳中最も初期に属するといわれる。後円部頂上に雷電宮をまつつてある。

径六二メートル、くびれ部幅三二メートル。五世紀初頭の築造とされ、市内



III 古戸・桐生道の現状と文化財



東矢島新田 阿弥陀堂の鉦鼓



ショケラの髪を毛をもつ青面金剛

東南「こいづみ」と四方面を示す。なかぜは屋島町の対岸で、かつて上州側の平塚河岸と繁栄を競った中瀬河岸である。地藏像の多様な姿は、見ていて興味つきないものがある。享保十六(一七三二)年の地藏は、菅の河原に集まった子供の霊を守護する姿が刻まれており、他に類例の少ない像塔である。斜めうつむきかげんに子供の霊を見守るやさしい姿は印象深い。また、阿弥陀堂の軒先には元禄十三(一七〇〇)年の鉦鼓がかかっている。

高林交差点へ戻り、太田・熊谷線を北上する。荻原鉄工先の信号を過ぎ、次の信号を右折して東矢島の集落へ入る。右折するとまもなく右手に観音堂

高林交差点を逆

に右折(東へ)して東へ六〇〇メートル、中古店街角を左折して十字路を右折して医院角を左に入り、狭い三差路を左に曲がると東矢島新田の新田墓地がある。

ここには多くの念仏地藏があるが、安永七(一七七八)年の地藏像台座は道しるべになっており一東矢島村東西新田中、西おじま なかぞ道

が見える。読誦大乗妙典千部塔が二基あり、自然石の方の台座に経読曆が刻まれ、宝暦十一年四七才の時、天明三年七〇才の時とある。経読曆を記した経塔は、古戸・桐生道筋ではこれ一つである。

ここから約四〇〇メートル、店の十字路を右折し倉庫の先を左へ入ると薬王寺がある。参道の地藏像二体を見て山門に入る。境内の北西隅一番奥に青面金剛が二つある。一つは貞享二(一六八五)年銘、享保十三(一七二八)年銘のもう一体は、三戸の日本的呼び名である「ショケラ」の髪を左手でつかんでいる。一見、赤ちやんを抱いているように見える。ショケラの髪をつかむ姿の青面金剛像は太田で六基、この街道筋では丸山薬師にもう一基見られるだけである。境内にはこの他光明真言供養塔(百万遍供養塔)、秩父坂東西国供養塔とともに明和七(一七七七)年大乗妙典六十六部供養塔安永五(一七七六)年など多くの石塔類がある。

藤原長良公を祭神とする東矢島の長良神社は、新井八幡宮とともに市指定重要無形文化財の獅子舞が有名で、十一月二十四日に秋祭りが行なわれる。

先の交差点を左折(西へ)し、二〇〇メートルほどで左へ入り、宗川産業入り口の所に西矢島の赤城神社がある。大黒天文化十三(一八一六)年や水鏡寛延二(一七四九)年などがある。この北三〇〇メートルの所に安楽寺がある。大きな地藏像元禄十四(一七〇一)年の他、二十一夜塔、青面金剛など石塔が多い。境内左手の薬師堂は眼の神様といわれ、今も十二月に村で供養している。

国道を北へ進むと右に市民プール、左に富士重工矢島工場が見える交差点になる。この次の丁字交差点を右折する。曲つたらすぐ左へ入る道が旧道である。ここを曲らずに少し行くと左側に正泉寺があり、門前道路端の庚申塔万延元(一八六〇)年の台座は「左尾島 東小泉 右太田」と三方向を指示する道しるべになっている。

旧道へ入ると昔日の趣はないがようやく車の喧嘩からは解放される。右手



正泉寺門前の道しるべ



太田警察署付近の旧道

に小公園が現われるから、公園に沿って送電塔の立ち並ぶ広い道へ右折する。すぐ十字路になるので左折する。旧道は公園から直進していたが、都市計画で一〇メートルばかり失くなった。左折するとまもなく竜舞・藤阿久バイパス。これを越えて下町風の静かな旧道を五〇メートル弱で右角に太田警察署のある広い道路に出る。警察署の手前を左へ入ると飯田の霊雲寺がある。寺の開基は永正八(一五一一)年没の横瀬業繁(金山城二代城主)で、寺号はその法名「霊雲寺殿義山宗忠居士」からとる。開山は矢場の恵林寺二世住職天意長明大和尚と伝える。新田義貞を弔う金竜寺の孫寺に当る。本尊仏は、鎌倉末期の作と推定される木造の釈迦如来像で、市重要文化財に指定されている。境内には百番供養塔兼道しるべ嘉永六(一八五三)年があり「右めぬま ふっと 左こいつみ あかいわ」と刻まれる。石橋供養塔天保九(一八三八)年は太田に二基しかな



生田万筆の墓碑

く珍しい。青面金剛元禄十三(一七〇〇)年の他に地藏像、二十一夜塔(如意輪像)、廻国塔などがある。警察署十字路の広い道を五〇メートルほど西へ行った新井の集落に小暮扇家がある。庭に勤王の国学者生田万の筆になる小暮照房の墓碑天保五(一八三四)年がたてられてある。新井の名主小暮照房は生田万と親交があり、天保二(一八三一)年に万の太田来住をすすめた一人で、万の熱烈な支持者であった。後に万の紹介によって平田篤胤の門人になった。



地藏像 庚申(地藏院)

この西方には市指定重要無形文化財「新井八幡宮獅子舞」を伝承する八幡宮がある。ここから二〇メートル弱西に、八幡宮の別当寺、十輪寺がある。境内には太田市内で最も大きな廻国塔である高さ三・九メートルの立派な日本回国供養塔延享二(一七四五)年や甲子塔元治元(一八六四)年他多数の石塔群がみられる。

警察署十字路を右(東)へ行き、南一番街通りを越えて市民会館先の交差点を右折する。四番目の十字路を左に入ると小舞木の円養寺がある。山門前に地藏像の万霊塔正徳六(一七一六)年が建てられている。この台座は道しるべ

III 古戸・桐生道の現状と文化財

No	名称	年号	備考
1	岡山城跡	室町時代	古堤あり(文祿堤か)
2	一字一石経塔	宝永三年	泉福寺境内、石造物多数
3	地藏像	明和三年	宝電寺参道
4	道しるべ	安政三年	古戸赤城墓地
5	長良神社	石祠 元文三年、宝永五年他	
6	不動明王像	享保一〇年	高林不動堂
7	朝子塚古墳	五世紀初	県指定史跡前方後円墳
8	旧代官屋敷	富沢氏宅	
9	石庚申	万延元年	長勝寺庚申塚
10	道しるべ	宝永三年	高林地藏堂、地藏像
11	御蔵神社	明和八年	同右、二十一夜塔(如意輪観音像)
12	道しるべ	安政七年	東矢島新田墓地
13	地蔵像	享保一六年	同右、子供の雲を守る地藏
	鉦鼓	元禄一三年	同右、阿弥陀堂
	青面金剛	享保一三年	薬王寺境内、シヨケラを持つ

を兼ねており「右ハ古戸 左ハ館林」と示している。  
 警察の十字路を北進すると市役所通りと交わる。これを左(西)へ行き、  
 太田・熊谷線を横断し次の交差点の先右側に地藏院がある。ここでは地藏庚  
 申塔寛文九(一六六九)年が見られる。地藏像庚申は、この道筋では他に東  
 金井に一基あるのみである。千庚申文化元(一八〇四)年、甲子塔文化元年の  
 他多くの石塔類がある。  
 市役所通りをこえるとまもなくスーパーユニーにつき当る。ユニーの店頭  
 をまわると東武線の地下道になる。地下道を上ったらすぐ左の旧道へ入る。  
 T字路を右へ曲り、南裏通りとの十字路を通過すれば本町通りの足利銀行太  
 田支店東十字路タバコ屋の辻に出る。地下道からこの十字路までの間が、か  
 つての間の道で、道の狭さに旧状を感じさせる程度である。

1 古戸渡しから太田宿へ

27	元寺墓地	石造物多数
26	獅子舞	念仏地藏など石造物多数
25	経読経路経塔	長良神社、市重要無形文化財
24	大黒天	東矢島観音堂、他に数点
23	地藏像	文化一三年 西矢島赤城神社
22	道しるべ	文化一四年 安楽寺境内、石造物多数
21	雷電宮	万延元年 正泉寺門前の庚申塔
20	釈迦如来像	正徳四年 円業寺門前、万霊塔(地藏像)
19	道しるべ	明和九年銘標柱、他数点
18	獅子舞	鎌倉末期 靈雲寺
17	道しるべ	嘉永六年 同右、小暮、島家
16	生田万筆墓碑	天保五年 新井、八幡宮、市指定重要無形文化財
15	獅子舞	延享二年 十輪寺境内、石造物多数
14	辨財天	寛文九年 地藏院境内、石造物多数
	千庚申	文化元年 同右
	辨財天	文化二年 伊佐須美神社境内、石燈籠二基

二、太田宿から松原渡しへ

本町通りは旧例幣使道太田宿の宿通りで、この十字路には高札場があった。  
 ここから熊野の追分までの間は「母衣輪道」と呼ばれた。  
 十字路から北へ幅二・五メートルの狭い一方通行の道を入ると、深川医院  
 北端で北裏通りとT字路になる。これを左折し五〇メートル先の三差路を右  
 折すると旧太田女子高校校門にき当るので、敷地沿いに北へ進むと大通り  
 と交差する。これを越えて北へ約三〇〇メートルでT字路になる。右へ入る  
 幅二・五メートルの車輛進入禁止の道が旧道である。この道はすぐに太田・  
 熊谷線からのびる大通りと交差するが、これを直進して熊野町の旧道へと進  
 む。



大光院吉祥門

境内には珍しい阿弥陀像陰刻文久元（一八六一）年や六地藏安永十（一七八一）年などの石造物がみられる。受樂寺は、太田駅北口の西側一画にあったが、昭和三十三年都市計画によって現在地へ移転した。明治三年の新田・山田・邑楽準西国三三観音の三番札所であった。

じいが坂を下りて大門通りへ入り、八瀬川手前を右折すると大光院の門前町である。この通りほど典型的な門前町景観は、県内では



受樂寺 阿弥陀像陰刻

門が現われる。幕末から明治初期の建立とされ、欄間に梅妻鶴子の図柄の彫刻がみられる。有名な彫工弥親寺音八が師事した市内脇屋出身の岸亦八の作とされる。

先の丁字路の手前、写真館の十字路を西へ行くと高山彦九郎をまつる高山神社がある。明治十二（一八七九）年にこの天神山中腹に創造されたが、昭和七年に神明造りの現在社殿を山頂に新築した。丁字路を左折してじいが坂を上りきった右手に、懸樋山受樂寺の壮麗な山



金竜寺



金竜寺 由良氏五輪塔と新田義貞供養塔

他にない。通りの両側には土産物屋、飲食店が軒を並べる。門前町のつき当りに吉祥門（市指定重要文化財）が建っている。大光院は義重山大光院新田寺といふ。新田氏の出自を唱える徳川家康が、新田氏の始祖義重をまつるため慶長十八（一六一三）年に創建した。この山門は元和元（一六一五）年、まさに大阪夏の陣に終止符が打たれたときに竣工したところから、家康が命名したといわれる。間口七・二九・奥行二・八四メートル、瓦のふきかえや一部の修理を除いてほぼ当時のままである。初代住職に芝罘土寺の観智国師門下で四哲と称された呑竜上人を迎えたことから「呑竜様」と愛称されている。開山堂北側には呑竜上人の墓や孝子源次兵衛の墓があり、本堂前には立派な石灯籠文化十（一八一三）年が建っている。

大光院北方の山麓には金竜寺が静かなたたずまいをみせる。寺号は新田義貞の法名「金竜寺殿貞山良悟大禪定門」による。応永年間（一三九四—一四二八年）義貞の三男義宗の子横瀬貞氏が父祖追善のために開いたと伝える。

寺は享祿の変(一五二八年)で岩松氏から実権を奪った横瀬氏(水祿七・一五六四)年に由良良改姓)の菩提寺として栄えたが、天正十八(一五九〇)年金山落城による由良氏没落とともに衰えた。寺には義貞の鎌倉攻めの時の戦利品といわれる寺宝の、李竜眠筆十六羅漢像がある。本堂裏には由良氏関係の五輪塔が林立している。金山城を拠点に東毛の地に勢力をふるった横瀬国繁以下由良成繁に至る一門を率う供養塔である。長享二(一四八八)年国繁、永正十七(一五二〇)年国経、天文十四(一五四五)年泰繁、天正六(一五七八)年成繁等々があり、法名と紀年銘等が刻まれている。これらの背後に義貞没後三〇〇年、寛永十四(一六三七)年建立の新田義貞供養塔が建てられている。いずれも市指定重要文化財である。

金竜寺から松風峠へ向かう最初の上り坂右手に万葉歌碑が建ち(昭和三十二年建立)にひたやま、ねにはつかかな、わによそり、はしなるこらし、あやにかなしも、しらとはふ、をにひたやまの、もるやまの、うらかれせななとこはにもがも、の二首が刻まれる。

松風峠を上りつめる手前を左へ金山ドライブウエーを上ると本県唯一の国指定城跡金山城跡に行く。金山には平安時代末に新田氏の城が築かれたと伝えるが、文明元(一四六九)年新田義貞の曾孫新田家純が重臣横瀬国繁に命じて金山城を再築させた。城主は家純→尚純→昌純と続いたが、昌純は家老横瀬泰繁(国繁の曾孫)に殺され(享祿の変)以後実権は横瀬(由良)氏に移った。天正十一(一五八三)年、北条氏邦の攻撃で落城したが、天正十八(一五九〇)年北条氏は豊臣秀吉に破れて金山城は廃城となった。金山城は、日本式山城と朝鮮式山城とを混合して構築した典型的な山城で、その守り易く攻め難い構造は太田道灌の称賛するところであった。駐車場北側は旧西成跡。駐車場から少し戻り、休み屋の所を左へ入る。入るとすぐ左右に分岐するので左の道を進むと西天倉台西断崖(堀切)、西天倉台下断崖、物見台下断崖、物見台、大手口馬場下、馬場下残存石垣、月の池へ来て本城水の手郭に



金山城跡 日の池

入る。旧大手道の石段を上ると日の池(本城水の手郭神水)、水の手郭の広い平地地そして頂上の天主曲輪となる。ここに明治十八年創建の義貞を祭る新田神社がある。山頂からの展望はすばらしい。

熊野町の旧道へ戻る。旧道を進み東光虹の家の三差路を右に入ると熊野の無量堂がある。ここには一字一石塔元祿一四(一七〇一)年、南無阿弥陀仏、名号塔宝水元(一七〇四)年、三界万靈塔文化三(一八〇六)年などがある。ここは新田・秩父三十四観音の一六番札所であった。

旧道はやがて桐生道と足利道との三差路、熊野の追分に合流する。桐生道と足利道に挟まれた三角形の所をハリツケ田とかハツツケ田と呼ぶ。正徳年間(一七一―一七一六)榊原式部太夫一行がこの付近にさしかかり、農民は土下座でこれを迎えていた。ところが一人の少年が近くの林の中で木を切っていて行列を迎えようとしないう。しかもその木は櫛であったから榊原の首を切ると言いがかりをつけられて磔刑に処された。南金井村の人々は少年の薄幸を哀れんで正徳六(一七一六)年追分の辻に立派な石地蔵をたてたという。今この地蔵は東金井洞谷寺にある。台座が通じるを兼ね「右ハ足利道 左ハ丸山道 地主南金井村中」とある。

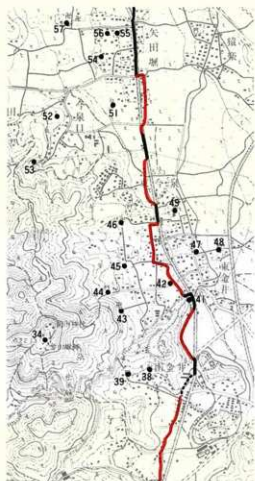
追分から少し戻り牛乳屋前を東へ行くと東長岡の長運寺がある。寺の東、墓地入り口の道路脇に太田市内最古で唯一の三戸(三戸)庚申塔寛文二(一六六二)年が建っている。日月・二鳥・二猿を配した舟型石塔で「影候戸・影常戸・



南金井の旧道



長運寺 三戸庚申塔



沿線唯一の道祖神（二柱神社）

命児戸、南岡菩提 大日本国東山道上野州山田郡蘭田莊新田領東長岡郡伊豆山村庚申供養人数廿七人、奉建立石塔一字者也、各主敬白、寛文二壬寅年折秋吉祥日」と刻まれている。

追分から国道一三二号線に入ってまもなく食堂の角を左折すると再び旧道である。ここから約九〇〇メートルの間は幅一五メートルで旧状をしのびせる。この道はT字路につき当るが、かつてはそのまま直進していた。T字路を左へ進むと先の洞谷寺へ行く。石段左手に道しるべを兼ねた如意輪観音像の二十二夜塔明和元（二七六四）年があり「右阿しかかぢら 左き里うみち」とある。これも追分の辻にあつたものと思われる。石段を上った左側に既述の地藏像がある。

洞谷寺の少し西に二柱神社がある。ここには古戸・桐生道沿線で唯一の道祖神がある。東毛地方には道祖神がきわめて少なく、太田市内にはわずかに五基しか存在しない。

先のT字路を右へ折れて国道へ出、少し行くと低い切り通しになる。旧道はT字路からここへ抜けていた。切り通しの所を左へ亀山の山裾沿いに入る。この道は土道で旧状をよくとどめている。再び旧道へ出るとすぐ「金山自然公園入口」の看板が建つ交差点になる。この交差点手前左の水路端に地藏像を持つ庚申塔（寛文年間一六



東金井の旧道



曹源寺 さぎえ堂

明和四(一七六七)年があり、山門を入れて左へ行くと永享九(一四三七)年の五輪塔がある。新田、秩父三四観音の二三番。先の旧道はまもなく国道へ合流しそうになるが、そこを左折して大栄工業

六一(七三年)が一基ばつんとたつている。交差点を左折したらすぐ右折して幅二・五メートルの屈曲した旧道へ入る。最初の十字路を左折した所に二十二夜塔弘化三(一八四六)年と天明八(一七八八)年の雄渾な筆勢で刻まれた庚申塔他三基の庚申塔が建っている。これらは入金井村(現宿金井)の建立になるが、宿金井では今なお二十二夜様と庚申様の会食を行っている。ここから一番目の辻を左に入ると金山山麓を背負うように玉岩寺の森が見える。金山石を

敷いた参道と石段が美しく、金竜寺と並んで太田で最も景観のすくされた寺といえよう。参道中ほどに地藏像享保五(一七二〇)年と二十二夜塔(如意輪観音像)

の角を右へ入るのが旧道である。この角を曲らずに直進し、T字路を右折していくと終点到水福寺がある。鎌倉室町時代の名号(角)塔婆一基、廻国塔宝水八(一七一一年、読誦塔正徳六(一七一六)年などがある。寺の手前、T字路西の松岡堅一郎家には、ともに市内で数少ない已待塔文化元(一八〇四)年と千庚申寛政六(一七九四)年がある。旧道はやがてT字路につき当るの右折してまた国道へ出る。このT字路を右折すると前方、国道のむこうに曹源寺の観音堂(さぎえ堂)が見える。曹源寺は、新田義重が京都から迎えた養姫の菩提に文治三(一一八七)年祥寿院とよぶ一字を建立したことに始まると伝える。のちに義重は弥陀三尊を安置した。新田義貞没後寺は荒廃したが、その四男と伝える横瀬六郎貞氏の子貞俊は院内に葬られ、法名を曹源寺殿等林良齊居士としたので、嫡子貞国は院を曹源寺と改め伽藍を建立した。その子孫由良国繁のとき金山廢城となり寺は衰微し、その後二回の火災で堂宇すべてを焼失した。寛政五(一七九三)年に再建されたのが日本三栄螺堂として有名な観音堂である。さぎえ堂の正称は三匠堂といひ。三匠とは三回めぐるの意である。堂の内部は三層になっており、下一層から秩父三四番、阪東・西国各三三番の順に一〇〇体の観音像が回廊に沿って安置され、右めぐりに同じ所を二度通らずに巡拜できる構造になっている。堂は木造方形、間口、奥行ともに八間(二四メートル)高さ一〇メートルほどで、建築学史上貴重な文化財である。境内には南北朝時代の宝篋印塔延文三(一三五七)年や戦国時代の五輪塔永正一八(一五二一)年、天文四(一五三五)年、鎌倉室町時代の名号(角)塔婆一基が見られる。また、市内で三休しかなない珍しい線刻地藏明和三(一七六六)年二体がある。その他十六日念仏塔寛延元(一七四八)年や庚申塔、七仏多仏塔など多くの石塔群がみられる。曹源寺は、新田秩父三四観音の二四番であった。さぎえ堂山門から一本東の道を少し南に下った店の前の辻一角が照明寺跡地である。ここには鎌倉室町時代の名号(角)塔婆、大黒天文化元(一一八

○四年や庚申塔四基、馬頭観音二基、二十二夜塔など石造物が多い。この辻には「かいさん様」と呼ばれる金山石製の地藏座像があり、治病神として今なお地域の信仰を得ている。この辻を東へ入ると前方に飯玉神社の森が見える。飯玉様とよばれるこの社は、安産の神として現在も絵馬の奉納がなされている。

曹源寺入口の国道へ戻り、少し行つて電気屋手前を左に入ると、やがて数戸の集落につき当る。つき当りの左角をかつては一里塚とよび戦後まで老木と井戸があった。旧道は集落の中を通り細い農道になって国道へ接合する。福島病院の看板の所まで国道を進み、そこから右へ斜めに入るのが旧道である。逆に左へ病院方向へ曲ると、右手水田の中に市史跡「巖穴山古墳」が見える。方位と一致する方向に築かれた一辺三〇メートル、高さ六・五メートルの方墳で、墳丘南面中央に横穴式石室が開口している。石室全長は八・四メートル、自然石を用いて構築してある。



巖穴山古墳

古墳時代終末期七世紀末葉の築造と考えられている。太田地方に現存する唯一の方墳で、規模の面でも金山東北地域の古墳中最大である。現在は巖穴山古墳のみが孤立してあるが、かつては一大古墳群を形成していた。この北方矢田堀には古墳の残片を屋敷内にもつ農家が数戸みられる。この道は丘陵につき当って丁字路になるのでそこを右折するとすぐ大日塚に行く。丘陵頂部が古墳になっており、大日塚社殿の裏に石室が開口してい

る。墳丘上には鎌倉・室町時代の名号(角)塔婆が二基建っている他に辨才天天保七(一八三六)年、大黒天元治元(一八六四)年、出羽三山修験塔元治元年がある。大日塚周辺の菅ノ沢、八ヶ入、諏訪ノ入の丘陵斜面には小規模な古墳や須恵器の窯が多数分布する。先の丁字路を南に行き舗装道終点から山道を少し入ると左手に福池がある。福池右側の斜面が「菅ノ沢遺跡」で、駒沢大学の発掘調査によると一〇×六〇メートルの範囲に須恵器窯跡七基、未採掘窯跡六基、炭窯一基、製鉄炉跡三基、小石室古墳三基、住居跡一基、その他灰置場などの関連遺構が多数検出された。また大日塚北西方の水田地割は、条里制の遺構と考えられている。

福島病院看板の所を右に入り、三メートル幅の旧道を北進すると丁字路になるので左折すると国道と交差する。これを右折して国道を進み、矢田堀集落の出はすれで毛里田中学校入口へ右に入るのが旧道である。中学校入口手前ブロック塀の間を左に入ると瑞岩寺に行きあたる。この寺は金竜寺の末寺で、新田秩父三四観音の最終札所でもあった。境内の地藏像宝曆十二(一七六二)年は遺しるべを兼ね、台座に「石大原道」左わきや道」と記されている。藪塚本町大原、太田市脇谷の地名からみて、本来はこの西方古水の三差路辻に建っていたものと考えられる。奥の墓地には鎌倉・室町時代の名号(角)塔



瑞岩寺 遺しるべ

婆が一基あるが、この左側面には「矢田堀城主泉伊子守繁俊」と刻まれ墓標に使われている。繁俊は瑞岩寺の中興開基であり、天正十二(一五八四)年北条氏





勤兵衛屋敷の名号塔婆



二十三夜塔 源訪神社

に攻められて金山麓城の際に、金山城北部の強戸吉沢口を準備した大将である。(新田金山軍記)天文二十二(一五五三)年の宝篋印塔、天正五(一五七七)年五輪塔その他多くの石造物がみられる。

瑞岩寺の東、園道から寺へ入る道へ南から店の前へ丁字に交わる道がぐる。この道の西側が諏訪神社、東側が勤兵衛屋敷とよばれる民家。この一帯が旧矢田堀城跡で、かつての土塁が残存している。矢田堀城主泉氏の祖基国は金山西城殿であり、子供がなかったので由良国経の次男基経(享祿の変で金山城主となった泰繁の弟)を養子に迎えた。基経の子が既述の繁俊である。勤兵衛屋敷の北西隅には鎌倉時代の名号(角)塔婆が五基ならんでいる。高さ一メートル余、幅三〇センチ余の凝灰岩製で、南無阿弥陀仏の立派な六字が四面に刻まれ、名号の上に天蓋、下には蓮華座が彫られている。その一基には「為原淡路十郎信光女子也 正□二年大付□四月」と銘があり正応二(一二八九)年に建立されたことを知る。名号塔婆はこれまでに水福寺、曹源寺、

照明寺跡、大日塚、瑞岩寺で六基見えた。名号塔婆の分布は、県内で太田市と桐生市のみに限られ、全部で二五基ある内の一四基がこの桐生道沿いに見られる。他の四基は桐生道より一キロ以上東にあり、七基は桐生市川内町に集中している。この分布範囲は鎌倉・室町時代の園田荘および園田氏に關係する土地である。園田荘司成家は、鎌倉時代の正治二(一一二〇)年法然上人に僧衣して智明坊と称した。上人の称名念仏を會得した智明坊は、元久二(一一二〇五)年に増郷し、以後四十三年間この地で浄土教の教化に専心した。名号塔婆の造立はこの智明坊の活動と深くかかわると考えられている。なお、園田荘の中心は、矢田堀の北方丸山から吉沢あたりと推定され、ここはまた久寿三(一一五六)年園田御厨二〇〇余町歩がおかれた。

勤兵衛屋敷の反対側の一面が諏訪神社の境内になる。ここには高さ二メートル、市内で最も高い立派な二十三夜塔弘化四(一八四七)年や青面金剛元祿五(一六九二)年などがある。この道を三〇メートルほど南へ行ったアルミサツシ屋さん長嶋家(看板がある)には、市内でたまた一基の十九夜塔嘉永七(一八五四)年がある。

園道へ戻り、毛里田中学校入口の車輛進入禁止の旧道へ入る。ここから丸山の宿に至る旧道は、旧杖の雰囲気を感じさせる。丸山の宿通りへ出る手前に大円寺がある。境内には高さ二メートル余、市内で最も高い堂々たる二十三夜塔文政十三(一八三〇)年や南無阿弥陀仏名号塔文政十二(一八二七)年などの石塔類がある。

丸山宿通りへ丁字路で入ったら左へ行き、正面に丸山を見て園道を越え、火の見やぐら前のタバコ屋角を右へ入る道が旧道である。丸山宿は古戸・桐生道唯一の「御朱印御伝馬継立候場所」で、古戸・桐生道と東山道と推定される伊勢崎・足利線との交点に位置する交通上の要地であった。高山彦九郎は「小俣行」で「丸山は町並屋作、東西の通也はたこや(旅籠屋)もみゆ、宿の中小溝流る」と宿場景を記し、渡辺華山は「このうどん屋で岩本家の人々

の出迎えを受けてしばし休息している。しかし、小村の丸山は常に人馬不足に苦しみ文久元（一八六一）年の史料によれば通常の伝馬勤めのほかに「桐生町出店定飛脚両会所月二十八童往掃共馬繼仕実々難渋二付、追々漬家人少ニ相成云々」と伝馬継立で村が圧迫された様子が述べられている。宿通りに沿う水路の南側が広い空地になっていて昔日の宿場集落をしのばせる。

宿通りのつき当りが丸山で山頂に米山薬師をまつる。丸山の薬師様とも呼ばれるが、本来は宿西はずれの清光寺の薬師堂である。薬師への上り口に文政十（一八二七）年、俳人悟十齊一知の建てた芭蕉句碑がある。「山寺酒、佐比しと都芸よ野老保理」芭蕉元禄元（一六八八）年の句「此山のかなしと告げよ野老堀」の改作とみられている。山頂近くには自然石に彫った嘉永二（一八四九）年の庚申塔が三一基林立している。元文五（一七四〇）年の背面金剛像は、シヨケラ（三戸）の髪の手をつかんでいる。また山門脇の



大円寺 二 十 二 夜 塔



芭蕉句碑

四九）年の庚申塔が三一基林立している。元文五（一七四〇）年の背面金剛像は、シヨケラ（三戸）の髪の手をつかんでいる。また山門脇の



丸 山 宿



丸山宿北の旧道

面白い風貌をみせる背面金剛像延宝四（一六七六）年は、太田で唯一の二臂（手二本）の像で、年代も四番目に古い。この外高きメートル、市内で二番目に大きい廻り塔慶応元（一八六五）年などがある。丸山山頂からの展望はずばらしく、足下に丸山宿の集落景がみられる。大円寺から宿通りに入った丁字路を右へ行くと学音寺がある。大日尊念仏供養塔享保二（一七七一）年は太田で唯一のものである。その他五輪塔天正九（一五八一）年などがある。宿通りタバコ屋角から狭い旧道を北へ進むと丁字路になるが、旧道は用水路をこえ水田の中を農道となって国道へ交わる。この丁字路西の集落に岡田とも家の墓地がある。ここには文和三（一三五四）年の相輪を欠く宝篋印塔と応永二十七（一四二〇）年、文禄三（一五九四）年の五輪塔がある。ここから一〇メートルほど行った右手、田の中の岡田田村家墓地には康安元（一三六一）年の宝篋印塔がある。

旧道は原宿へ分かれる三差路先で国道と合わさり、約五〇メートルで右の水田の中へ入り、吉沢集落の手前国道がカーブして上り坂になる所へ抜ける。国道を越えんとす、店の前で丁字路になる。この辻に太田で最古の二十三夜塔文政八（一八二五）年が建っている。右折するとまた国道へ出るが、左折して道が新田堀と並走する地点に青面金剛元文五（一七四〇）年などがある。<sup>(65)</sup>

国道を約一〇〇メートル、家並の切れた所から左へ入る。ここから約一キロの旧道は新田堀に沿って山裾を走る。途中字反丸の右側に馬頭観音弘化三（一八四六）年と梵字のウーンを刻んだ数少ない庚申塔寛政十二（一八〇〇）年がある。<sup>(66)</sup> 右側に人家がとぎれてまもなく地区集会所の前へ曲ると国道に出る。この国道右端に石塔群があり、子待塔寛政八（一七九六）年、青面金剛元禄十四（一七〇一）年などがみられる。子待塔には甲子塔、甲子供養塔、大黒天が含まれるが「子待」と刻されているのは太田ではこれ一基のみである。ここから一〇〇メートルばかり国道を進んで右手田の中の墓地に名号（角）塔婆が一基ある。この右側にガソリンスタンド跡があるのでここを左折し旧道へ戻って少し行くと採石場入口の橋がある。橋を渡った所が岩神様の石窟で、古生層のチャートがえぐられた岩陰に石祠があり、地元では八王子様という。高山彦九郎は「堀の向ふ岩山もとに石の小祠あり石神明神と号すとぞ、火打石出ツ」と記した。虫歯の神様という。ここにある赤城神社は昭和五四年に吉沢から移したもので嘉永六（一八五三）年銘の常夜塔二基も移したものである。

旧道は再び国道に合流し約二〇〇メートル程行ってゴルフセンター入口看板の所を右に入り道に左折する。この道もすぐまた国道へ出る。唐沢の川を渡った国道左側に寛政元（一七九八）年他一基の庚申塔がたっている。この先で桐生市広沢町七丁目に入る。国道を北進するとやがて右側に本田総合設備株式会社があるから、旧道はここを左へ入る。この二〇〇メートルばかり手前



名号塔婆（桐生家墓地）

を左に入れば東沢寺に行きあたる。寺の上り口に大きな自然石を用いた立派な庚申塔が六基並んでいる。古いのは元文五（一七四〇）年、新しいのは万延元（一

八六〇）年。六地藏寛政五（一七九三）年も味わいがある。国道から左へ入った旧道は坂になり、それを上るとまもなく再び国道へ下りる。国道は料めに横切って、一段低い渡良瀬川低地へ下りていくのだが、今は通行止めで車は通れない。広い国道を少し行き歩道橋手前の狭い道を右へ下りると旧道へ出られる。旧道は再び新田堀と並行する。最初の十字路を右折すると、もう前方に渡良瀬川の堤防が現われ、道はここで行き止りになる。かつてはここに松原渡しがあり、綱づたいの渡船で対岸地野へ越した。

先の広い交差点の手前を左へ入る道が旧大間々道である。大間々道は、松原渡しが使えないとき、大間々町を迂回して桐生へ行く重要な道であった。ゆるい坂道を上り始めると左側に椿の森とよぶ園藝家墓地があり、康暦二（一三八〇）年の宝篋印塔、正和元（一三二二）年、応永二（一三九五）年、同二十三（一四一六）年の五輪塔がある。椿の大木は桐生市の保存樹に指定されている。<sup>(71)</sup>

加茂沢の橋を渡って左折すると式内社として有名な加茂神社の前へ出る。桓武天皇の延暦十五（七九六）年官社に列せられ、陽成天皇の元慶四（八八〇）年に正五位下勳十二等を授けられたという。延喜式巻十、神祇十、上野





78	77	76
加茂神社 彦部屋敷	十一面観音菩薩像	室町期(カ)
室町(戦国)	室町期(カ)	正和元年、応永二年、同二十三年 法楽寺、加茂神社の本地仏 境内に石造物多数
県指定史跡、土塁・石垣残存	境内に石造物多数	

### 三、松原渡しから天満宮へ

境野の松原渡し地点には、近くに天神の社という小丘があったが、度重なる洪水での土砂流出や境野中学校の拡張で取り除かれ、今は平坦地となっている。



数少ない境野の石造物

桐生道は、そこから境野中、境野小学校の南西端あたりを北上していたと思われ、近世・明治末のこの道周辺一帯は、低地で荒地や雑木林、葦の原だったようである。今は宅地化が進み、公共施設が進出して、旧道の面影はほとんどなく、また、旧道の位置確定も難しい。  
ただ一つ、境野小学校の西門より先(西北)へ二〇〇メートルほどのところに庚申塔寛政十二(一八〇〇)年など石造物三基があり、往時をしのばせる。  
その先の信号を越えてすぐのシブヤ電気角の小路を右折すると白滝神社に出る。この辺より微高地となるとともに、近・現代に大き

な変化がなかった地域であるため、道の位置、道幅などはある程度古の姿を残している。

白滝神社境内に水神宮安政元(一八五四)年二基があるが、水難の多い土地柄から、はじめに水神がまつられ、明治ごろより機神に性格を委ねたらしい。このほか境内には、石燈籠寛政十二(一八〇〇)年があり、推定樹令二五〇〜三〇〇年のムクノキとケヤキの巨木(ともに市指定保存樹)がある。往時、荒野を行く旅人の目安や助まじとなったであろうかと想像できる立派な樹である。その根元に庚申塔天明八(一七八八)年と二十二夜塔萬延元(一八六〇)年があるが、元よりここにあったかは確かでない。

白滝神社から北上すると、道は小さく右へカーブし、左からの小路と合流し、約一五〇メートルほど進んだところで国道五〇号線(以下単に五〇号線という)にぶつかる。ここまでがいわゆる桐生道である。魚峰魚店の角だが、ここに高さ約三メートルの「天然記念物 加茂神社大さきき入口」の石塔が建っている。



加茂神社の大サカキ

前述の左から合流した小路を南へ戻ってバイパスを横切り、ふみ寿しの東の小路をそのまま南進すると衛生センターに行きつく。それを右折したところが、三ツ堀加茂神社である。この境内に、先の石塔が示す県指定天然記念物の大サカキがある。  
目通り一・四二メートル、樹高約一三メートル、推定樹令約二〇〇年だが、枝は四方に伸張、樹勢は旺盛で、サカキとしてはまれにみる巨木と認



境野二丁目の旧道

六基、二十三夜塔安政二(一八五五)年など、江戸時代後期のものが多いが、保存状態のよい石造物が多い。

魚崎の角に戻り、五〇号線を左折して二〇メートルほど行き、正田青果店のところの二又を右手に入った道が、境野町二丁目辺の旧道である。白滝神社横からの道同様、この先桐生中央信用金庫のところまで再び五〇号線に合流するまでの約二〇メートルは、早くから新道のつけ替えがあつて本道からはずれたため、比較的よく旧状を残している。

桐生中央信用金庫のところまで再び五〇号線と合流し、本道は北上するが、ここから左折し、最初のT字路を右折して約二〇メートルほど西へ行くところ、昭和橋を渡つて来た五〇号線に出る。これをつきぬけると新宿通りになる。

この通りの最初の南へ行く小路の左角に、「右太田東、左あし加、江」という道しるべがある。年代不詳なのが残念だが、書体、風化の様子などから推



新宿通りの道しるべ

められ、まことに壯観である。

ほかに桐生市指定保存樹のカヤ群もあり、古くから自然豊かな地であつたことがうかがえる。さらに、常夜燈文化十二(一八一五)年に、

すと近世のものと思われる。街道関係の文化財の少ない桐生にとっては、貴重な存在である。

さらに一〇〇メートルほど行くと定善寺がある。桐生の呑竜橋で、六十六部宿供養塔享保九(一七二四)年や庚申塔文政二(一八一九)年ほか同五基、高山彦九郎次女、三男の墓、その他石造物が門前、境内に多い。

桐生中央信用金庫のところまで戻り、再び五〇号線に沿って本道を北西に進むと、四〇〇メートルほどで交番のある変形四差路に至る。信用金庫からここまでは、全く旧状は残っていない。四差路から右前方の道へ入ると、再び旧状のうかがえる道となるが、本然寺を過ぎた二〇〇メートル余りでそれも途切れる。道筋はほぼ昔のところだが、道幅は広くなり、左に小工場群が現われ、景観的にも全く往時の面影は消え失せる。

本道は坂口接骨院角の十字路を直進するが、ここを右折して二〇メートル、新川にかかると安楽土橋を渡つてすぐ、新橋旅館の先を右折し、国鉄両毛線を越えてT字路を左折した右に清水児童公園がある。公園の中央に根元の太い、枝ぶりの良い大木があるが、これが県指定天然記念物の伝承桐生大炊介手植柳である。永正十三(一五一六)年ころ、当時の桐生重綱がこの付近で鷹狩りをした際、名馬浄土黒が突然倒れ、重綱も間もなく死去した。重綱



伝承桐生大炊介手植柳



日本織物株式会社発電所跡のタービンと発電機



本町通りに面する浄運寺

の子桐生大炊介助綱は、馬をこの地に埋め、供養のため一本の柳を植えたのがこの木であると伝えられる。樹種はアカメヤギ雄株で、目通り四・五メートル、樹高二メートル、推定樹令約四〇〇年である。

坂口接骨院角の十字路へ戻り、これを元から直進して次の十字路を五メートルほど行つて、みやフトン店角のY字路を左折すると繁華街が始まる。表通りに出て右折すると、ここより北へ約二キロ、桐生新町（現在の本町通り）が天満宮まで続く。

本町通りを横切つて、二五〇メートルほどで新川球場につきあたり、そこを左折し、五〇〇メートル弱進むと片側二車線の幅広い道路との十字路に至る。ここを右折して一〇〇メートルほど北西へ行くと、桐生厚生病院の道側、やや高台に日本織物株式会社発電所跡がある。明治二十（一八八七）年創立の会社だが、この発電所は昭和二十二（一九四七）年キャスリン台風の渡良瀬

川氾濫で水路が決壊されるまでの約六十年間、織都桐生市における織物産業発展のための原動力であった。跡地には、当時のドイツ製タービンと直結の発電機一基（三二〇馬力、二二キロワット）が設置してある。

本町通りのところまで戻り、北上し始めるとすぐ新川の盛運橋がある。川や橋といつても今やともに本来の姿ではない。新川は、桐生城主桐生國綱が観応元（一三五〇）年に檜杵山城（桐生城）を築いた際、もとの遊水地に渡良瀬川の水を通して南方の要害としたとされる。その後、天正元（一五七三）年に桐生氏が滅亡し、再びもとの遊水地となり、明治二（一九六九）年、三年の大水で渡良瀬川の放水路となつた。以来、境野方面でしばしば洪水を引き起こし、昭和二十二（一九四七）年のキャスリン台風の大洪水まで紛争の種であった。その後、昭和四十七（一九七二）年から同五十四年までの歲月をかけ、暗渠下水道の工事を施行した。

盛運橋を渡つて一〇〇メートル足らずの左側に浄運寺がある。表通りに面して山門があるが、繁華街の真中なので見過してしまふ。この寺には、桐生市指定重要文化財の安土宗論記跡天正七（一五七九）年がある。なおこの寺は天満宮から新川までの桐生新町が開設され、町づくりの進む慶長十七（一六一二）年に新宿より現在の地に移転して来た。

浄運寺より市街地を東西に横切る国鉄両毛線を渡り、踏切からさらに四〇〇メートルほど本町通りを北上すると高島屋デパートがある。新川よりここまでは、近年道路の拡幅やビルの高層化など、市街地の改変が進み、旧状は全くないといっていいほど残っていない。

高島屋を右折し、三〇〇メートルほど東へ行くと、光性寺不動明王の案内板が右道端に建っている。その角を右折して三〇メートルばかり行くと、右に光性寺がある。この寺には、文化四二（一八〇七）年、住職が入山する際に京都より動座せしめた（寺伝による）という桐生市指定重要文化財の光性寺本彫不動明王像がある。不動明王にしては、静かでやさしい雰囲気であると



Ⅲ 古戸・桐生道の現状と文化財



桐生新町路地



天満宮

という評判を聞く。  
 高島屋角に戻り、再び本町通りを北上するとだんだんにぎやかさが薄れ、本町二丁目の矢野商店あたりまで来るとかすかに旧状をうかがえる建物、景観もある。通りの右（東）側の矢野本店と矢野茶店の間の路地を右手に入ると狭い小路の両側に白壁の土蔵や木べいが昔のたたずまいを示してくれているようだ。矢野本店は、当代で九代目、酒、しょうゆ醸造の老舗である。矢野商店の次の角を右へ折れ、約三〇メートル東へ下ると養泉寺があり、桐生市指定天然記念物の養泉寺のケヤキがある。寺の裏に雄大な姿で立ち、市内のケヤキの中で目通りにおいて最大とされる。  
 本町通りをさらに北上すると天満宮に行きあたると、ここより新川までの直線街路は、慶長十（一六〇五）年ころ、全く新しい計画的な新町（列村）として造られたものである。

No	名称	年号	備考
79	庚申塔	寛政一二年	他に石造物二基
80	水神宮	安政元年	石宮、他に同様二基、白滝神社境内
81	石燈籠	寛政二年	二基、他に庚申塔（天明八年）、二夜塔（万延元年）、
82	大サカキ 常夜燈 二十夜塔	文化一二年 安政二年	県指定天然記念物、加茂神社境内、他に五基、
83	六十六部宿供養塔	不詳	新宿通り東端、
84	庚申塔 伝水桐生大炊介手植柳	享保九年 文政二年	「右太田東、左あし加、江」定善寺門前、
85	日本織物株式会社発電所跡	明治二〇年	清水児童公園内、
86	安土宗論記録 光性寺木彫不動明王像	天正七年 文化四年	桐生市指定重要文化財、浄運寺蔵
88	養泉寺のケヤキ		桐生市指定重要文化財、
89	天満宮		他に庚申塔（万延元年）など、石造物多数

3 松原渡しから天満宮へ

桐生にとってこの古戸・桐生道（桐生の人は太田街道といっていた）は、江戸への最便路として、明治二十三（一八九〇）年十一月の両毛線開通まで、専ら利用していたようである。古戸で利根川を渡り、妻沼から熊谷に出て中山道に合し、江戸に入る。道程二十四里半、二日半路であった。  
 また、京都、大阪など上方方面への通路は、江戸から東海道を上るものと、伊勢崎から高崎へ出て中山道を利用するものとの二路によった。  
 そして、足利在地猿田村（現栃木県足利市毛野）河岸より、渡良瀬川を下って利根川に出、古河、関宿を経て江戸に入る水路も利用されていた。

## あとがき

本年度の歴史の道調査は五街道という数多い街道調査であり、しかも調査員の人数も限られた中での調査であった。そのため、調査員の方々には、前回までの調査以上に多くの負担をかけることになってしまった。それにもかかわらず、各街道について道の確定、道の現状、文化財の分布状況等確確に把握でき、初期の目的を達成することができた。

今回の調査においても、近代化の波の速さに驚かされるのが度々であった。年度当初の調査時と年度終了の際での写真を比較すると、わずか一年足らずの期間に、同じ場所でありながら全く異なる風景が各街道で写し出された。このことから歴史の道調査が時機を得た調査であるとともに、調査の重要性をも再認識させられた。

また、本年度調査対象街道は、県内でも臨街道的な存在であり、そのためこれまで未調査の部分が多い街道であった。今回の調査によって、これらの街道の道が確定できたことや、一連の文化財調査ができたことは、今後の街道研究上、大きな意義をもつものと思われる。

ここに本調査によって明確になった点をあげると、川と水田の低湿地の川に築かれた堤防上をくねくね曲がりながら、三メートル幅の旧道がはるか遠くまで続く古河往還。これは県内の他街道では見ることのできない光景である。

また、桐生の絹織物が江戸や上方へ搬出された道であった古戸・桐生道。新道と旧道が縄をなうように残されており、この旧道の一宿である道の中央に堀割を残す丸山宿は印象的であった。

そして、中世には既に相当利用されていたが、江戸時代には口留番所が置かれ、ほとんど通行禁止となりながら、再三にわたり開削願いが提出され、明治初年ようやく開通した時に築かれた峠付近に残る石垣。あるいは、佐渡奉行街道の中世から近世にかけての通路の変遷や、中山道から玉村宿に至る

数々の道筋。また、民家や水路に昔の宿場の面影をとどめる八木原、大久保、総社宿の景観。これらは貴重な街道資料である。

また、本調査では、最も長い距離をもつ下仁田道、下仁田地方の特産である砥沢紙、こんにやく、ねぎ、和紙の搬出路として重要視されていた。現在でも旧道沿いの宿場町であった藤岡、吉井、富岡、下仁田、砥沢等には土産造りの商家あるいは旅籠屋風の家々が往時の面影をとどめている。だが、国道十八号のバイパスの役割はいまでも変わらず、自動車の交通量は年々増加し、今後の保存対策が待たれる。

特に、この下仁田道の枝道ではあるが、甘楽町小幡の城下町としての道路中央を流れる堀割及び家並、陣屋内の石垣の続く道筋は保存状態が極めて良好であることが確認された。これは本年度調査の大きな成果といえよう。

これらの成果の陰には幾多の労苦や協力があった。これまで不明であった旧道の道筋について、地元教育委員会の方や地元の方々に日曜日にもかかわらず、炎天下の中を一日中案内していただいたり、背丈より高い草むらをかきわけ橋脚の跡を教えていただいたり、種々お世話になった。

また、調査も必ずしも順調に進んだわけではなかった。樹木や光線の関係で冬季にと予定した写真撮影は、今冬まれにみる大雪のため、石仏等雪下に埋れ、雪とけ時まで撮影困難となったこともあった。あるいは、現在廃道になった峠道を数時間かけてようやく上ったところ霧のため、まわりがすすんで写真撮影できなかつた等、数々の障害もみられた。

だが、調査員の方々の献身的な調査への参加により、課題を一つずつ克服し、ここに、本報告書を刊行することができた。協力いただいた方々に深謝する次第である。

この報告書が、今後の研究用資料として、さらに県民一般の街道探訪のハンドブックとして利用されれば幸いである。そして、調査本来の目的としての保存整備の基礎資料として、本調査で得られた資料をさらに詳細に分析し、十分検討していきたい。

(文化財保護課)

## 古 戸 ・ 桐 生 道

---

印刷 昭和56年3月25日

発行 昭和56年3月31日

発行 群 馬 県 教 育 委 員 会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

TEL 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社

---